



はな さ 花は、どうして咲くの

オスとメスから生まれた子孫は、絶めつしにくい

地球に、バクテリアのような生き物が現れたのは、35億年前ごろといわれています。バクテリアなどは、あるところまで成長すると、体の一部がちぎれて、2ひきになるような仲間のふえ方で、子孫を残していました。でも、この方法では、まったく同じ体質をもつ仲間しか残らず、悪い体質などが強まっていったり、環境の変化や病気にも弱く、絶めつすることが多かったといえます。やがて、お父さんとお母さんのように、2ひきの親から、別々な性質や体質を伝える遺伝子をもって、両方の性質を受けついだ子どもが生まれる、仲間のふやし方に発展していきました。このほうが、環境の大変化があっても、生き残れるものがいて、絶めつせずすんだのです。

はな しそん のこ さ 花は、よい子孫を残すために咲く

植物も、同じような発展のしかたをしてきました。今から3億4000万年前ごろ、花粉を作る「お花」と「め花」をもつ生物が現れました。そして、今のような、め花のめしべに、別の花のおしべの花粉をわたすことで、両方の花から、ちがう性質や体質をもった種（子孫）ができる、仲間のふやし方になったきました。花は、植物が種を作るための、大切な役目をするところなのです。

地味な花を咲かせる、スギやコムギ、トウモロコシなどの花の花粉は、風が運んでくれます。ほかの大部分の花は、虫などに飛んできてもらって、花粉を運んでもらわなければなりません。そのため、花は、虫が好きなおりを出したり、目立つ色の花を咲かせ、あまいみつを用意し、虫がたくさん集まるようなしかけをしています。（監修・矢野 亮）

